

箱のなか

薄桜

涼虫の平日

蛍光ペン

ピンクの蛍光ペンを持って、
白い紙に印字された、請求書、の上に線を引く。

請求書に使う色はピンクと決まっている。
いつのまにかそうになった。水色や黄色の
役割もそれぞれある。使う色は三色だ。

例えば項目に一と二がある場合、
一は水色、二はピンク。三がある場合は黄色。

白い紙は色とりどりになる。
私は物事を画像でとらえたいところがある。

なぜか、ひとつの紙の上が水色とピンク
だけの配色だと落ち着かない。
空気が濃すぎるように思うのだ。
男女のふたりを連想するのかもしれない。
そこに黄色が入ると、中和される。

水色とピンクは、かすかに相手を意識する
ような間柄だ。だからこそ余計に、
紙の上の温度があがってしまう。
なんとなしに、お互いが照れている。

黄色は能天気にとやどやと入ってくる。
いいたいことをいって大きな声で笑う。
水色とピンクはほっとする。黄色がいて
くれたほうがいい。まだ日が高いうちは。

誰もいなくなった深夜のオフィスで、
水色とピンクはどんなふうにごろご
しているのだろう。
窓辺から差し込む月明かりをふたりで
見上げているのかもしれない。
たぶん、言葉も交わさないまま。
ただ、このひそやかな時間をうす甘く感じながら。

ある朝、机の上に残してきた紙を見ると
納品先、という文字の上に引いたはずの

黄色が消えていた。

私はふふ、と笑ってしまう。

黄色はああ見えてなかなか気が利くのだ。

水色とピンクは、それぞれの役目の

文字の上に、澄ました顔で乗っている。（涼）

ごはんだ

その3

「ちま子さん、知ってました？桜の花ってピンク色じゃないんです。白です」

一緒に働く中国籍のSさんが、ぼそっと言った。

「それに、開花宣言が出て桜はあんまり咲いていません。友達とお花見に行きました。でも、5つくらいしか咲いていません」

今年は急に暖かくなったせいか、ポップコーンがはじけるみたいにして桜が咲いた。ポンポンポンと桜の木のそばに行けば音が聞こえるんじゃないか、と思う位に。

でもSさんがお花見に行ったのは、開花宣言が出てすぐの頃だったのだろうなあ、と早口で怒ったように話すSさんを見ながら思う。

毎年毎年、桜の葉が緑色に変わり、青々としてくると「ああ、今年も桜茶を桜の季節に試せなかった、、」と思うことを思い出す。

「桜茶」というのは桜の塩漬けを浮かべたお茶の事だ。

とても鼻根にしている小説中に出てくる。

「お花見」の宴の最後に、小さく縮れた「何か」が入った湯のみが皆に配られる。そして、それにお湯を注ぐとふわぁっと茶碗の中で薄ピンクに染まった桜の花が開き、桜の匂いが部屋に広がる、、というシーンを読んで初めて「桜茶」という名前を知った。

その本を読んだ後「絶対に桜の花が咲く頃、桜茶を飲むんだ！」と張り切っていたのに、寒さが緩んで、桜の花が咲く頃には頭に霞がかかったみたいになって忘れてしまった。

春はいろんなものの実体がぼわぼわと消えるような、消えたかと思ったらすうっと現れるような、、暖かいような、でも何だか寒いような、、

そして、そんな時期が過ぎて、太陽の日射しも色濃く変化して、モノの輪郭がはっきりする頃になると「ああ、そうだ、そうだ、そうでした」と桜茶の事を思い出す。

桜の話をしていて、ふと「すあま」が食べたくなる。

もっちりとしているのだけど、大福みたいに伸びるわけではなくて、中に餡が入っているわけでもない。鼻を近づけると、うっすらと米みたいな香りがする（気がする）。

薄いピンク色だったり真っ白だったりして、コンビニのレジ前にひっそりと置かれていたりする。

私は「あれ」が案外好きだ。

近くで見ると白くて、遠くから眺めるとピンク色で、そんな曖昧なものが世の中にはたくさんあってもいい。予想宣言が大きく外れていても、それはそれで笑って過ごせる世界なら、もっと楽しい。

うつらうつら、はらはらと白い桜の花びらが散っていく。（ち）

涼虫の読書案内

「すべて真夜中の恋人たち」 川上 未映子（講談社）

フリーランスの校閲者として日々を淡々と過ごす冬子が、ふとしたきっかけで物理学の高校教師と出会い、不器用に恋に落ちていく時間の経過が描かれている。

冬子は人と接することや気持ちを言葉に変換するのが苦手で、引きこもりがちなタイプだ。いわゆる普通の恋愛を経験することのないまま、三十代も半ばを過ぎてしまう。

ある夏の日、冬子はカルチャースクールに初めて見学に行く。人見知りの彼女にとっては一大決心だ。アルコール依存気味の彼女は、慣れない場所に出向く緊張からステンレスボトルに日本酒をつめてトートバックに忍ばせる。待合室で受付の順番を待ちながら、彼女は極度の緊張とアルコールの飲み過ぎで具合が悪くなってしまう。そのとき親切に声をかけてくれたのが三東（みつつか）さんだった。

待合室で眠り込んでしまいトートバックを失くした冬子に、三東さんは帰りの電車賃を貸してくれる。そのお金を返すきっかけで、ふたりは喫茶店で会うようになる。

冬子は待ち合わせの前にビールを飲んで緊張を緩ませてから出向く。喫茶店でふたりは、ぼつぼつと自分のことを話す。仕事のこと、好きな本や音楽のこと、物理学の話。光の仕組み、色が見える原理。

三東さんがプレゼントしてくれたショパンのCDを、冬子は壊れたように繰り返し聴き続ける。三東さんの指先、冬子さんと呼ぶ声、会ったときの記憶ひとつひとつを思い出しながら。そして冬子は、初めて素面のまま約束のない日に喫茶店へ向かう...

冬子は体内に恋という器を持たない。だから三東さんとの間に何が起きているのかがわからない。自分の心の中にぼつりと嵐のようなものが生まれたことに気づく。それがあつという間に大きくなり、やがて自分自身を覆いつくすのを何も手出しができないまま茫然とみつめる。熱病にうなされたような状態が続く。何週間も、何ヶ月も。仕事にも手がつかなくなってしまい、唯一の友人かつ仕事仲間でもある編集者の聖（ひじり）とも連絡を絶つ。

冬子の体験していることは、聖の行う意志的かつ器用な恋愛や、メディアや雑誌が提唱するマニュアルのような恋愛とはまるで違っていた。依存も見栄も自己満足もなく、ただ恋というものが暴力的なまでの力で冬子にもたらす甘やかさや苦しさを身ひとつで受け止め、混ざり合い、ただそこに在るのだった。それは冬の凍てついた風を受けながら裸の枝のままじっと耐え、春になる

と固い蕾がほころびゆっくりと花びらを開いていくような、自然の営みから感じる官能と似ていた。

恋は相手がいなくてはできないけれど、ひどく個人的な体験なのかもしれない。相手との関係性はまた別の物語で。恋はあるときふいに心に訪れ、いくばくかの時間を共に過ごし、そして消えてゆく。三束さんを心に通すことで冬子が見た、深い闇とまばゆい光。

冬子の胸の奥には果てしない銀河のような広がりがあった、それは吸い込まれそうなくらい遠く澄んだ情景だった。ずっとそこにいたいような、そして何かを祈りたいような気持ちにさせられるのは、冬子の生き物としての美しさ、純度の高さによるものかもしれない。（涼）

ち

最近ね、身につける色やデザインが変わってきたんですよ。

ち 涼

どんなふうですか？
グレーにもすごく惹かれるんです。

あの、じいいとみてるとじんわり浮かび上がってくるような…感じ？

あと茶色。

でも黒は避けちゃうの。

ち 涼

以前はグレーや茶は着なかつたんですか？

そう、全く。前はそういう

色つて、なんか…どこか

ものすごくイヤだったんで

すよね、(笑)

もちやもちやするという

か、着ていて「やさしすぎ

ぎる(笑)」みたいな。

涼

すずちまの
重箱の
すみっこ

(爆笑)私も茶色はずっと苦手でした。クールじゃないから不採用つて。

でも最近はそのでもない

かなあ。

多分、色が強いと疲れる

んだと思うんです。

わかります〜私もね、

黒は強すぎるから分量

減らしてて。

最近ネイビーばかり。

なんか優しいの(笑)

もしかして優しくされたい

のかな？私たち？(笑)

素材もね、ウールが半分

以上かあ、重いかな、と

か、レーヨン入ってるから

涼

テローンと気持ちいいかも、とか(笑)

うんうん、私もレーヨン

愛はすごいです。

あとね、時計も、以前は

ぱつと見で買っちゃつた

のが、今は身につけて。

ダメなら、サイズ通りに

紙を切つて手首に合わせ

たりして…

わあすごい、慎重です

ね。きつと、心地いい

ものを厳選するように

なつたんでしょね。

私ね、時計しないん

ですよ。重いものは

一切身につけたく

ないから。

あつ、心地よさ追求しま

くつてる〜(笑)

箱のなか (2014年春号)

薄 桜
#fdeff2

涼虫 (bellring64@gmail.com)

涼虫の読書案内HP

<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

ちまちま子 (chimachima513@gmail.com)

ちまちま通信HP

<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

Copyright © すずちま All Rights Reserved

ネットプリントのご案内

漫画も入った「箱のなか（薄桜）」は、全国のファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKのネットプリントができるコピー機からプリントできます。

プリント方法

- 1、お近くのネットプリントができるファミリーマート、ローソン、サンクス、サークルKに行く。
わからない場合は<http://evsmap.cvs-sds.com/CS/CC1948176406>で検索できます。
- 2、コピー機で「ネットワークプリント」を選択する。
- 3、ユーザー番号「M1TJ52FGR6」を入力する。
- 4、「箱のなか薄桜号」を選択し、文章プリントを選択します。
- 5、A3サイズになっているか確認後、プリントスタートボタンを押します。
- 6、「箱のなか薄桜号」がお手元に！！
半分に折って、そのまた半分の半分に折ると、、完成です！！

※申し訳ありませんが、コピー代のご負担をお願いします。

箱のなか 緋色

<http://p.booklog.jp/book/80639>

著者：すずちま企画

Twitter ID：suzuchima

制作者のHPは

(涼) 涼虫の読書案内：<http://bellring64book.blog.fc2.com/>

(ち) ちまちま通信：<http://chimachimaletters132.blog.fc2.com/>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80639>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80639>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ